文理融合による人と社会の変革基盤技術の共創　　2022 年度
2022 年度採択研究代表者　　年次報告書

小林 哲郎

神戸大学 大学院法学研究科
研究員

民主主義のレジリエンスを高めるための社会変革技術

研究成果の概要

2022 年度は主に 3 つの課題に取り組んだ。

第 1 に、民主主義の諸理論をレビューし、公平で競争的な選挙など、民主主義にとって不可欠な制度的要素を抽出し、それらの民主主義を構成する制度的要素のそれぞれについての不信や不満をボトムアップに抽出するため、日本人成人を対象とするオンライン調査を実施した。自由回答データを分析するためコーディングカテゴリとコーディングルールを繰り返しアップデートし、十分なコーダー間信頼性係数を達成した。現在、自由回答全件をコーディング中である。このコーディングによって、日本人が民主主義の諸制度に対して抱いている不信や不満を網羅的に抽出し、それらを利用した非民主的ナラティブを作成する。

第 3 に、先行研究に基づいて、日本人が非民主的ナラティブにどの程度説得されやすいのかを調べるオンライン実験を実施した。権威主義国で生じている人権侵害やアメリカにおける政治的極性化や人種差別などの諸問題に関して、権威主義国に有利な非民主的ナラティブと西側民主主義国で主流となっているナラティブの双方を用意し、発信ソースの有無の操作を加えた実験条件を設定した。従属変数はそれぞれの諸問題に関する態度であり、権威主義国発の非民主的ナラティブと主流派ナラティブの相対的な説得効果の違いを検討した。その結果、非民主的ナラティブと主流派ナラティブの双方がそれぞれが意図する方向に説得効果を持つが、非民主的ナラティブの方が効果量は大きいことが明らかになった。また非民主的ナラティブの説得効果は政治的知識量や陰謀論的信念などに調整されておらず、海外の先行研究とは異なる結果を示した。

第 4 に、ソーシャルメディアやブログ、書籍などを広くレビューし、典型的な非民主的ナラティブを収集した。それらをナラティブとして定型化し、140 字以内に編集することで 2023 年度以降の実験刺激として利用可能な形に整えた。